

英文の読み方を考える X

—要素の移動と談話①—

平井 正朗

SVX となる文の要素が前方、もしくは後方にシフトされることがあり、前者を左方移動、後者を右方移動と言う。英語が第2言語である日本人学習者にとってこの言語現象は、誤読を引き起こす要因となる。本稿では、要素の移動に焦点をあて、読解スキルを考える。

(01) Above all, conversation is a social activity and, as such, it shares characteristics of all social activities. *These characteristics we usually take for granted*, so that it is only their absence we notice. (関西学院大)

(とりわけ、会話は社会的活動であり、それ自体あらゆる社会的活動の特性を併せもっている。こういった特性を我々はふつう当然のものだと思っているので、結果的に我々が気づくのはそれがなくなったときだけである。)

第1文は「会話」と「社会的活動の特性」の関連性について述べたものである。第2文では take + O + for granted の O が文頭に倒置(→ These characteristics(O) we(S) usually(M) take(V) for granted(C))にされているが、指示形容詞 These は前文の all social activities の前方照応語句として、旧情報として機能、文脈の結束性をより緊密なものにしている。名詞に他動詞、もしくは前置詞の O が欠落した S + V が後続すれば O + S + V の倒置を疑うのが基本であり、O になる名詞と前文の結束性を意識した読み方をしたい。

(02) Animals are not stones. They live and they may suffer. Every honest person will agree that treating animals in some ways is inhumane and unjustified. But the good that has been done by medical investigations that

could not have been undertaken without animal subjects is so very great as to be beyond calculation; *this, also, every honest person must acknowledge*. Using animals is an inescapable cost of most successful medical research.

(東京大)

(動物は石ころではない。彼らは生きており、苦しむかもしれない。正直な人ならだれでも、動物が非人道的で、正当化できないような扱われ方をすることがあると認めるだろう。しかし、実験動物がいなければやろうと思ってもできなかった医学研究によってなされてきた恩恵は、計り知れないほど大きいものである。このことも、正直な人ならだれもが認めるにちがいない。動物を使うことは、医学研究を成功させるためには、避けられない代償なのである。)

(02)では他動詞 acknowledge の O となる this が文頭に位置したものになっている。指示代名詞 this は前文内容である「医学研究の恩恵」を指示し、ディスコース・マーカーとなる副詞 also は「医学研究の恩恵」というプラス・イメージに「万人の認知」という新情報を追加する談話構造になっている。

(03) "Four people out of five are not so happy as they can be," declares a well-known authority, and he adds: "Unhappiness is the most common state of mind." *Whether human happiness strikes as low a level as this, I would hesitate to say*, but I do find more people living unhappy lives than I would care to compute.

(東北大)

(“5人のうち4人が実際はそれほど幸福でない”とある有名な権威者は宣言し、さらに“不幸こそ人間

の最も通常な状態である”と付け加えた。人間の幸福がこれほど低いレベルにしか達しないかどうか、発言することをためらうが、確かに算定したくないほど多くの人が不幸な人生を生きていることに気づくのである。）

(03)では他動詞 say の O となる名詞節 whether 節が文頭に位置するものになっている。this は前文内容を指示する前方照応語句である。(01)~(02)とは違い、O が節である場合、誤訳するケースは多い。接続詞があればその終点をおさえ、文全体の中でどのような機能を果たしているか確認しながら読み進める必要がある。

(04) For example, Isaac Newton was deeply religious man, and *what we today call the Newtonian laws, he attributed* to God's handiwork. (慶応大)

(例えば、アイザック・ニュートンはとても信心深い人であり、我々が今日ニュートンの法則と呼んでいるものを、彼は神の創造によるものとした。)

(04)は他動詞 attributed の直接目的語となる名詞節 *what we today call the Newtonian laws* が文頭に位置する OSV の構造になっている。このように O が長い語句の場合、語法 attribute A to B をインプットしていなければ誤訳の要因になりやすい。

(05) My guinea pigs insist that, at a bookstore, as they are boarding a train or entering a restaurant toilet, they encounter others who, among themselves, say aloud, "Look, there's X." "Are you sure?" "Of course I'm sure. *It's X, I tell you.*" And they continue their conversation normally, while X hears them, and they don't care if he hears them: It's as if he didn't exist. (筑波大)

(私のモルモットたちは、書店や、列車に乗ろうとしているとき、あるいはレストランのトイレに入ろうとしているときに出くわした人々が、自分たちの間で大きな声で「ほら、見てごらん。X だよ」「ほんとう?」「もちろんだよ。まちがいないよ。X だ

よ。言っただろ」のように言う」と主張する。そして彼らはふつうに会話を続け、その間 X には彼らの会話が聞こえているが、彼らは本人に聞こえているかどうかなど気にしない。つまり、彼は存在していないかのような状況にあるのだ。)

(05)は SVOO 構造である I tell you (that) it's X. から派生したものと考えることができる。(03)では whether, (04)では what が節の開始を明示するマーカーとなっているが、(05)では接続詞がないため、倒置を見抜きにくい状況が生まれるようである。

(06) However, although all this was very pleasant reading, it didn't impress me: it's easy to get people to believe nice things about themselves. But what about the faults? *Will it get those too. I wondered* as I read on.

(福岡女子大)

(しかし、これらすべてはとても楽しい読書であったが、私を感動させなかった。自分自身に関するよいことを人に信じこませるのは簡単である。しかし、欠点についてはどうであろうか。それは自分の欠点についても簡単に信じこませるだろうか、と私は読み続けながら疑問に思った。)

(06)は「他人に長所を知ってもらうことは簡単である」と述べておき、逆接的ディスコース・マーカーである But を用いてトピックを反転させ、I wondered if it would get those too as I read on. の wonder の O となる if 節を疑問文に置換し、文頭移動したものと考えればよい。

(07) She was so happy and trouble-free. Mel wondered how long she would remain like this. *"That's nice,"* he said, "I like *that.*" (宇都宮大)
(彼女はとても幸福で、心配事はなかった。メルは彼女がいつまでこのような幸福で何の心配もないままでいられるのだろうかと思った。「それはすばらしい。それが気に入っているのだ」と彼は言った。)

(07)は第1文の内容を第2文で登場人物の心理として描写し、さらに第3文の指示代名詞 That が第

1文と結束している。加えて *That's nice* が *like* の目的語である *that* と連鎖し左方転移化していることを見落とすケースが見られる。

(08) "Picking up trash!" he shouted. "I'm cleaning this place up!" The remarkable thing was how kind everyone was to him. Like a friendly conductor, he greeted people as he went, and the majority responded to him. "You're doing a great job," one woman said. The man sitting next to me held up an empty potato chip bag. "You missed this," he said, waving it in the air. ***Whatever I expected***, it was not ***that***.

(愛知教育大)

(「ゴミを拾っています。ここを掃除しているので」と彼は叫んだ。驚いたことに、だれもが彼にとっても親切だった。親切な車掌のように、彼は進みながら人々にあいさつし、大部分の人たちは彼に返事をした。「ご苦労様です」と一人の女性が言った。私の隣に座っている男性は、ポテトチップの空袋をかざした。「これ忘れてるよ」と言い、それを空中で振った。これは私が予期していたことではなかった。)

(08)は文のSである *it* が「ゴミ拾いをしている彼に対する周囲の視線」という〈状況〉を表し、*that* は *whatever I expected* を指示している。一文に *it* や *that* などの指示代名詞が混在する英文解釈は「つまずき」となりやすい。

(09) "I was lost," Leon Fleisher says, and 40 years later you can still feel the choking despair. ***One of the world's premier concert pianists***, ***he*** was talking about the after-effects of a day in 1965 when the career so carefully developed unexpectedly ended. (東北大)
(「私は迷子だ」とレオン・フライシャーは語り、40年後、まだ窒息させるような絶望を感じているだろう。世界最高のピアノ演奏家の一人である彼は、慎重に積み重ねてきた成功が1965年のある日、突然、思いがけず終わってしまった後、自分の人生がどうなったかについて語っていた。)

(09)は *One of ~* と *he* が同格関係、もしくは分詞構文 *Being* の任意削除という解説が一般的であるが、*One of ~* という *top-heavy* のSを代名詞に置換し、左方転移することによってSを焦点化することができるというアプローチも可能である。

(10) It always amazes me how strongly people will argue when told they do everything by choice. ***They're so stuck on the "have-to" philosophy of life***, it's hard for them to let go.

(鳥取大)

(人々は選択によってすべてのことをするのだと言われるとどれほど強く反発するかはいつも私を驚かせる。彼らは「しなければならない」という人生哲学にとっても固執しているので、その考えを捨てることは難しい。)

(10)は、*They're so stuck ~* が〈原因〉、*it's hard ~* が〈結果〉を表しているので、*it's* 直前の従位接続詞 *that* を任意削除し、*comma* を付加して派生した〈因果関係〉を表す構文と解することができる。ここでの *it* は形式主語ではなく、*the "have-to" philosophy of life* を指示する前方照応語句である。

(11) Man, the chimpanzee and the gorilla are so similar that it is practically impossible to tell them apart. Absurd, you say. Gorillas are hairy giants of the forest, weighing half a ton, and chimps, though smaller, are no less hairy. ***As for man***, ***he*** walks upright, for one thing, has a large brain, and is naked. The three couldn't be easier to distinguish. (奈良女子大)
(人間、チンパンジー、ゴリラはあまりにもよく似ているので、実際、見分けることができないほどである。そんなばかな、と言うだろう。ゴリラは、森に住む毛深い巨人であり、体重は0.5トンもあり、チンパンジーは、もっと小さいが同じくらい毛深い。人間とは言えば、一つを例に挙げれば、直立して歩き、大きな脳を持ち、裸である。この3者の区別ほど簡単なことはない。)

as for + 名詞の名詞が左方転移した構造が(11)で

ある。名詞が後続する代名詞に受け継がれると考えた読み方に習熟したい。

(12) *E-mail as we know it* allows a high degree of privacy, which, in turn, helps generate more openness. (愛知県立大)

(我々が知る Eメールはかなりのプライバシーをもたらすが、逆に、それがより多くの心を開く手助けになる。)

(12)は名詞限定の *as* であり、*it* は E-mail を指示する前方照応語句になっている。名詞 + *as* + *S* + *V* (他動詞) + *it* [them] の構造では名詞の左方転移の“形”に習熟し、和訳、整序問題等に対応できるようにしておきたい。

(13) Artists and entertainers have crossed gender, racial, generational, and international boundaries with unprecedented ease and have been able to break loose of often confining local cultures. *Nowhere has this been* more true than in the United States, where other cultures have refashioned national tastes and have even challenged the idea that there is a shared “American” culture at all. (大阪教育大)

(芸術家や芸能人は、前例がないほど簡単に、性別、人種、世代、国際的な国境を超え、しばしば制約が多い地域文化から脱却することができている。このことはアメリカ合衆国以上にあてはまる場所はなく、そこでは、ほかのさまざまな文化が国の好みを生み出し、共有された“アメリカ”文化がそもそも存在するという考えに疑問をもつまでに至っている。)

否定を表す副詞(句、節)が文頭に位置する後続する語順は倒置される。初学者は“違和感”を覚えるかもしれないが、“書いてある通り”左から右に読み進めながら SV 構造を把握することに慣れておきたい。(13)は明示的否定副詞である *nowhere* が文頭に位置する例である。否定語が 1 語であるため、sense group をつかみやすいが、選択問題や正誤問題でケアレミスを誘発しやすい。なお、否定副詞の後の SV 倒置部分は話し手、書き手の〈判断〉、後続する部分は〈命題〉を明示すると考えてよい。

(14) We were now only a few feet from each other. I was just about to break into a smile, when suddenly I recognized him. It was Anthony Quinn, the famous movie actor. Naturally, I had never met him in my life, *nor he me*.

(筑波大)

(私たちはほんの数フィートまで近づき、満面の笑みを浮かべようとしたとき、突然、彼がだれなのかわかった。それは有名な映画俳優であるアンソニー・クインであった。当然、私は生まれてから一度も会ったことがなかったし、彼もまたそうであった。)

接続詞 *nor* においても統語的には同じような現象が見られる。(14)は、*nor had he met me in his life*. と同義である。反復語句の復元が必要である。

(15) Human reliance on animals is so widespread, so deep and complete, that there would seem to be little point in asking whether animals have rights.

We have, in fact, very good reason to ask and answer that question. The morality of animal use is indeed a philosophical issue, but *by no means is it* merely theoretical. (東京大)

(人間は広範に、深く、そして完璧なまでに動物に依存しているのであり、動物に権利があるかどうか問いかけても、ほとんど意味がないように思われる。実際、そのような問いを發し、答えることには十分な理由がある。確かに、動物を利用することへの道義は“哲学的”な問題ではあるが、決して単なる理論上の問題などではない。)

(16) In the cities in which we live, all of us see hundreds of publicity images every day of our lives. No other kind of image confronts us so frequently.

In no other form of society in history has there been such a concentration of images, such a density of visual messages. (横浜市大)

(我々が暮らす都会では、だれもが皆、一生の間、毎日、何百もの広告イメージを目にしている。ほか

のいかなるイメージであれ、これほど頻繁に我々の目に映るものはない。歴史のほかのいかなる形態の社会においても、これほどのイメージの集中、これほどの密度の視覚的イメージはなかった。）

(15)(16)は否定の副詞句 *by no means*, *In no other form of society in history* が文頭に位置する事例である。否定語が1語の場合は否定倒置現象を知覚しやすいが、副詞句の場合は文構造が捉えにくいようである。sense group に注意し、文間の結束性を意識した読み方をすればSV構造把握が可能になるだけでなく、直読直解にも直結する。このほか、頻出語句として、*in no sense*, *in no way*, *on no account*, *under no circumstances* などがある。

(17) *Only after high school, when she traveled weekly to the School of Music in Rochester, New York, did she find* herself, Mrs. Miller said. (学習院大)
(高校を卒業して毎週、ニューヨーク州のロチェスターにある音楽学校に通い始めてからやっと自分が本当にしたいことがわかったとミラーさんは言った。)

(17)は *only* に副詞句 *after* ～と副詞節 *when* ～が併合したものになっている。副詞 *only* がさらに副詞句や副詞節を伴って文頭に位置する構造として、*Only* + 副詞(*then* など)や *Only when*(*after*)～などがある。

(18) *Hardly* a week after being punished for having made fun of teachers in the school newspaper, I was once more invited to step down to the principal's office. (成蹊大)
(学校新聞で先生をからかって罰を受けて1週間もたたないうちに、私はもう一度校長室に呼ばれた。)

否定の副詞が文頭に位置しても(18)のような語順になることもある。自然言語を処理する過程で“左から右へ読む”を基本にSV構造を把握する演習を繰り返したいものである。

(龍谷大学付属平安中学校・高等学校 校長補佐)